



今回は 日本刀生産に関する探究活動 の報告です。

◇ 地域研究部・放送部合同チームで、刀剣職人さんの工房を訪問しました！

活動記録 2020年1月25日、2月1日、2月13日

- ・刀匠の吉田研さんの工房を訪問（1・25）。
- ・研師の伊佐地亨さん、昌充さんの工房を訪問（2・1）。
- ・束巻師の遠山康男さんの工房を訪問（2・13）。

2018～19年、関市古町遺跡の調査が行われた結果、室町時代の鍛冶作業に関連する遺構・遺物が多数発見されました。重層的に重なり合う炉跡、炉底に溜まった大型の鉄滓、火力を高めるためにもちいられたフイゴの羽口、鍛錬の際に飛散した鍛造剥片、火花が空気中で冷やされてできた粒状鉄滓、短刀をはじめとする鉄製品、砥石などから、この遺跡がまさに鉄精錬や鍛冶作業の場であったことが判明しました。

古町遺跡の調査は、市制70周年を記念してつくられる「関刃物ミュージアム回廊」の建設に伴う緊急発掘として行われました。古町周辺で鉄精錬や鍛冶が盛んに行われた室町時代、幕府の主導した日明貿易や、続く戦国動乱の本格化によって、刀剣の需要は大いに高まったものと思われれます。関市内ではこの古町遺跡以外にも、鍛冶屋敷の跡として知られる重竹遺跡（東海北陸自動車道・関インター所在地、関市下有知）が知られています。

私たち地域研究部と放送部は、古町遺跡や重竹遺跡の歴史的な背景や意義を探るための活動を計画・実践しています。その一環として、職人さんの工房訪問と聞き取り調査を行っています。

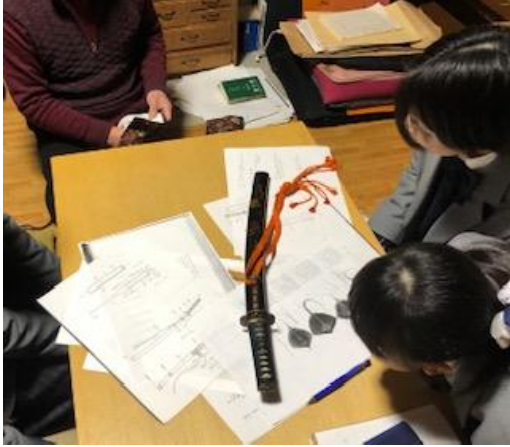
刀剣の町として名高い関市には、刀匠（鍛冶師）、研師、鞘師、塗師、銀師、束巻師といった職人さんが集住し、今も刀剣生産に従事しています。もちろん、室町・江戸期とは技術や材料等、今日とは異なる部分もあるかと思われれますが、職人仕事の作業工程や使用される工具・材料を調べることにより、遺跡からはすでに失われている様々な情報を獲得できるはずで

そのように考えた私たちは、関の刀剣生産に関わる職人さんの工房にうかがい、仕事に関する様々なお話をうかがうことにしました。

1月25日、刀匠の吉田研さんをたずね、富加町の加治田刀剣を訪ねました。日本刀に関する基礎知識をもちあわせていない私たちに、分かりやすく解説をしてくださいました。砂鉄からの鉄精錬、刀剣の鍛造の工程等、詳しく学びました。

「鎬を削る」「真剣勝負」「切羽詰まる」「とんとんかん」「相槌を打つ」「抜き差しならぬ」…。私たちの普段耳にし、口にする言葉の中に、刀剣関連の専門用語が知らないうちに入り込んでいることに驚きました。





2月1日、研師の伊佐地亨さん、昌充さんの工房を訪ねました。ここでもやはり刀剣の基礎知識を教えてください、さらに刀剣の研ぎの行程について詳しく学びました。日本刀の研磨は切れ味をよくするだけではなく、刀身の地鉄や刃文などを美しくみせるために研ぐのだそうです。そのために、目の粗い砥石から細かな砥石へと順に使い分けていくことも学びました。

2月13日、東巻師の遠山康男さんの工房を訪ね、東の外装を整える仕事について学びました。東巻きにもちいる鮫皮（実はエイ皮）や鹿皮は東南アジア産で、朱印船貿易の時代から日本に持ち込まれているそうです。

刀匠や研師によって作りだされる刀身は、拵（こしらえ）の仕事によってさらに美しく飾られます。その一方で持ちやすさや使いやすさといった機能面にも配慮がなされています。

今回、職人さんの工房を3か所めぐることにより、①刀を鍛え、②磨き、③飾る工程に関わる仕事について、ごく初歩的ではありますが学ぶことができました。今後も、鞆師、塗師、銀師といった職人仕事について、工房におもむいて学んでいく予定です。



使用写真 前頁より順に、吉田研氏、伊佐地亨氏、遠山康男氏宅で撮影。刀鍛冶の写真（刀匠は吉田研氏）は関市観光協会提供。